會報

1952年9月 | 163 | 日本山岳會

先發隊の言葉

今西錦司

木原博士のもとで、こんどのヒマラヤ計畫がたてられてから、かれこれもう一年になります。その後この計畫が日本山岳會に移されて以來、會員諸兄の熱烈な御支持と毎日新聞社の全面的な御後援によつて、いよいよ先發隊の出發というところまできました。まだ來年の本隊という大きな仕事がのこつてはいますが、計畫はたしかに實現するところまできたのです。個人や小人數の力では、とうていここまで持つてくることはできなかつたにちがいない。これは日本山岳會だからこそはじめてなしえたことであると思い、わたくしは、このことをいま會員諸兄とともに喜びたいのであります。それとともに先發隊に對する、みなさまの御力添えに、厚く感謝したいのであります。

さてこんどの先發隊ですが、あるところでは探檢隊と書かれ、またあるところでは登山隊と書かれまして、その性格あるいはその任務が、はつきりしないように御考えの方もあるかもしれない。そこで、これに對するわたくしの考えを申しあげておきたいと思うのですが、わたくしは、山登りというものは、四つの段階をへて發展するものと考えるのです。

第一は、山の發見、第二は、その探檢、第三はいよいよその頂上に登る、そして第四は、初登頂のすんだ山へヴァリエーション・ルートから登る、という順序を考えているのです。第一の山の發見、これはもうヒマラヤでも、新らしい山を發見するということは不可能になつている。すなわち山はみなわかつているのです。山を發見しようと思えば、揚子江上流の西藏境へでも行けばまだあるかもわからぬが、ここはちよつといま入るわけにゆかない。

つぎの探檢であるが、ヒマラヤでも、シッキムやガルワル、あるいはカラコラムさえ、もう探檢はすんでしまつたといえる。ヒマラヤで探檢からはじめなければならないところとして、殘つていたのは、ネパール・ヒマラヤとアッサム・ヒマラヤだけであつた。

そのネパール・ヒマラヤへ、一九四九年どろから、ぼちぼちはいるものがでてきた。そして一九五〇年にはフランス隊のいわゆる「最初の八〇〇〇米」であるアンナプルナIが登られたのであるが、こんなことはヒマラヤとしては、例外的なことであつて、普通はヒマラヤではまず探檢をやつて、登路が見つかれば早くてその翌年に、登頂を目ざすのが順序である。

木暮さんの「中央亞細亞の山と人」をみると、七四〇〇米以上の山がちようど一〇〇座あるが、その中の約三分の一はネパール・ヒマラヤに屬しているのであつて、いかにネパール・ヒマラヤに高峯が多いかがわかる。八〇〇〇米級の山だけをとりだして考えると、一五座の中一〇座までがネパール・ヒマラヤにある。しかし未探檢の山ということになりますと、もうドウラギリとアンナプルナは、フランスが探檢したし、チョ・オイゥも今年イギリスが手をつけた。ゴサインタンはチベット領内にはいつているからどうにもならない。

すなわちネパール・ヒマラヤに高峯が多いといつても、八〇〇〇米級の山で探檢の對象になるのは、マカァルゥとマナスルゥよりない。しかしマカァルゥはエヴェレスト山群にあるから、エヴェレスト隊とかちあうおそれがある。するとあとはマナスルゥだがもう他の國でも眼をつけているかもしれない。これはぜひとも早く名乘りをあげるべきだということになつて西堀君がカトマンヅでそういうことをいつたのですが、カトマンヅではマナスルゥという名は通じなかつた。マナスルゥの南にある七八六四米の、ヒマルチュリイという山はみな知つていた。それで向うに對してはマナスルゥといわないでヒマルチュリをやる、ということにしてあるのです。

これで探檢目標としてマナルスゥを選んだ理由はおわかりになつたことと思いますが、マナスルゥは山であります。探檢がすめばこんどは登頂ということになります。そしてこれが來年の本隊の仕事であります。ここでひと言申しあげたいのは、われわれがヒマラヤを考えますとき、まず文献を讀んで探檢の終つた山をさがし求め、この山をここからやれば登れるにちがいない、というたれかのサゼッションにしたがつて、ではこれをやつてみよう、と決心するのが普通なのでありまして、わたくしどもがヒマラヤ登山の計畫をたてました場合にも、いままではこの登頂という第三段階からはじまるような山登りしか考えなかつた。

（二頁下段に續く）

ネパール・ヒマラヤ登山計畫の經過概要

——先發隊を派遣するに至るまで

日本山岳會が毎日新聞社後援の下に一九五三年を期して實行に移そうとしているネパール・ヒマラヤへの登山計畫は、其後急速に進捗して隊長今西錦司氏以下五名の先發隊は去る八月二十五日早朝豫定通り羽田空港を發してインドへ向つた。

會が當初の計畫者であつた京大生物誌研究會から本計畫を引きついで以來、その推進と最高の責任とを擔つてきたヒマラヤ委員會は本計畫に對し寄せられた毎日新聞社をはじめ各方面からの絶大な後援に對し衷心感謝の意を表すると共に、こゝに至る迄の經過を概略報告する要があろうと思う。

本計畫は既に會報發表の通り、昨年來京大生物誌研究會に屬する本會々員等によつて計畫され檢討を續けられたものであつたが、その有力なメンバーの一人であつた西堀榮三郎氏が、本年二月偶ゝネパール入國の機を摑み、ネパール政府に對して登山隊入國の正式認可申請を行つたことから具體的に計畫が盛り上つてきた。西堀氏の歸國後に、この計畫の規模並にその國際的關係等を考慮の結果京大生物誌研究會から、これを日本山岳會の計畫として強力に推進せしめられたい旨の申出がなされ、會は本年四月十六日臨時役員總會を召集して愼重協議の結果この申出を受諾したのであつた。

會は直ちにヒマラヤ委員會の組織を結成し、委員長に會長槇有恒氏を、委員として松方三郎、木原均、日高信六郎、藤島敏男、伊集院虎一、三田幸夫、今西錦司、西堀榮三郎、堀田彌一の九氏を推薦した。會が特にヒマラヤ委員會を設けた理由は、この計畫がそれ自體日本の登山界に於て劃期的なものであり且將來國際的にも多くの接觸面をもつものであるからと云うことのほかに、日本山岳會としてはヒマラヤ登山という問題のみならず國内的にも多方面のやるべき仕事をもつているからであつて、本計畫の推進と責任の所在とを明かにしておくためであつた。

委員會の下に事務局の組織が作られ、總務、調査、裝備の三部に分つて實際の事務を推進することとなり、事務局長に松方委員、各部の責任者として藤島（總務）三田（調査）西堀（裝備）の三委員が夫々決定され、事務局部員として現在の理事及び會員三十名が參加した。

五月中旬ネパール政府からは、先に西堀氏が申請した入國の許可が同氏宛に屆き、それには一九五三年の登山隊入國を認めると共に本年はその先發隊の入國をも併せ承諾した旨記されていた。よつて委員會はいよいよ本年中に先發隊の派遣の意をかためると共に、目標の山をマナスルゥ（八一二五米）山群に決定し且隊員選考の段階に入つた。一方事務局各部門は夫々擔當任務の準備に進み、委員會事務室を辰沼理事宅（鐵鋼ビル前）の一室に開設した。

偶ゝ當時インドへ渡つた理事田口二郎氏が極めて有用な資料を得て歸國し、本計畫推進に重要な役割をなした。

委員會は先發隊の隊長として今西錦司氏を決定し、ついで隊員には何回もの愼重な論議の末田口二郎、高木正孝、中尾佐助、林一彦の四氏が決定された。會は更にネパール政府へ對して本計畫が京大から日本山岳會へ移讓され、會は強力なコンミッティーを組織して計畫を推進し、本年の先發隊として八月下旬今西隊長以下五名を派する旨の書狀を發した。これに對しネパール政府からは七月十一日附を以て、凡て快諾された旨の厚意の溢れた返書が屆いた。

かくて事務局各部門の仕事は日に增し繁忙を極め、理事加藤泰安氏は事務室常駐の專任者として總元締の役割を引受け（隊長今西氏が京都に在つたゝめこのことは事務遂行に不可缺であつた）、總務會計、裝備、食糧、用具、梱包等の各任務が凡て事務局部員たる會員達の手によつて熱心に進められ準備されたのであつた。

今西隊長以下五名の隊員は、八月二十二日東京へ集結を了り、二十三日正午から毎日新聞社に於て本田社長臨席の下に歡送會が、又同日三時からはYMCAに於て本會主催の歡送會が九十餘名の來會者の下に盛大に開かれ、席上槇會長の挨拶、松方理事長の經過報告

（一頁より續く）

しかるにこんどは探檢からはじまるような山登りをやろうというのですから、これは進歩か退歩かしらないがおもしろい現象だと思います。同じヒマラヤでも、ガルワルあたりはだんだん未踏の山がすくなくなつてきて、やがてわたくしが山登りの第四段階と申しましたヴァリエーションの時代にはいろうとしているのに、となりのネパール・ヒマラヤでは探檢からやらねばならないような山がまだ殘つている。そういう山が殘つているならそれからやろうというわけです。

探檢は探檢でどこか別のところでやり、登山だけを日本山岳會が引きうけるということも考えられますが、本會が探檢からはじめていまの計畫では二年越しで登頂しようというこの大きなマナスルゥの計畫を、取りあげられたことは、五十年の歷史を誇る本會が、それにふさわしい事業であるとお認めになつたからであろうと思います。わたくしどもは、この大事業の前段階に當る探檢を目的とした先發隊にえらばれましたことの光榮を感ずるとともに、會員諸兄の御期待に沿う成果をあげ、もつて明年の本隊のために貢獻したいと思つています。そして探檢と登山といつても、それは一つにつづけようと思えばつづくものであるということを、實踐をとおして明らかにしたいと思つております。

（一九五二・八・二三）

キスリング型ルックサック

地方有名運動具店で
取次販賣いたします

特大 ¥2.900　大 ¥2.800
中 ¥2.700　小 ¥2.600

東京都文京區湯島天神町 3の19
片桐盛之助
電話下谷 (83) 1794

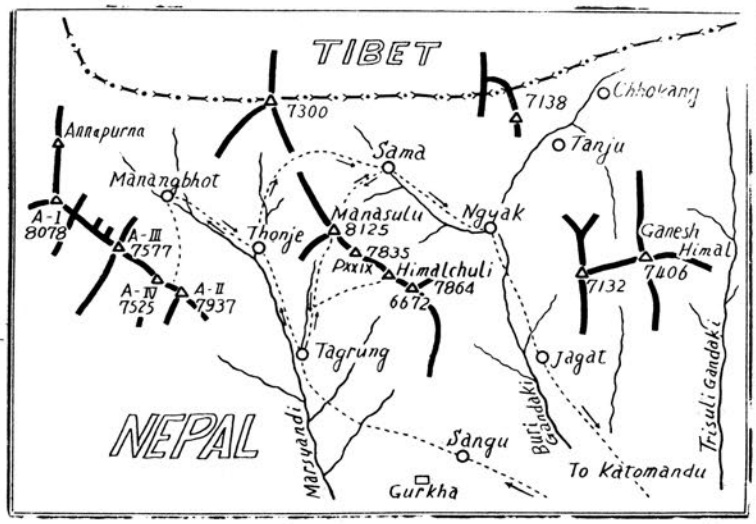
今西隊長の挨拶、日高信六郎氏の音頭で一同乾杯の後、東體協會長、森毎日新聞取締役の歡送の辭、更に臨席の冠松次郎、石川欣一、大島堅造、神谷恭等の古い會員諸氏からの激勵の辭を受けた。そして一行は八月二十五日午前六時BOACの檪によつて壯途についたのである。

先發隊の行動については會報誌上に逐次發表して會員各位へお傳えする豫定であるが、後援者である毎日新聞紙上にも掲載される筈であるから、それらによつて御承知願いたいと思う。

こゝで一應目標の山、マナスルゥ(Manaslu)について觸れておく必要があろう。周知の通りネパール・ヒマラヤはエヴェレストをはじめ八千米級の高峰十座を擁するヒマラヤ中でも一番高い山脈であり、ヒマラヤの名も畢竟これらの大雪嶺に對するヒンドゥ人の畏怖尊崇の念を表現したものであると云われている。登山者にとつてはまさに最も魅力的な、この山脈も近年までネパールが所謂禁斷の國であつたゝめネパール側からの遠征隊は極めて寥々たるものであり、英國が過去數回のエヴェレスト遠征をすべてチベット側から行つたのも、ネパール入國の困難さに基くものであつた。併し戰後ネパール國が、その門戸を開くに及びアンナプルナの初登頂をはじめネパール側からのエヴェレスト等々最近は急速に登山隊の入國をみるに至つた。

マナスルゥ山群はネパール・ヒマラヤのほゞ中央に位し、主峰マナスルゥ(八一二五米)の他に主なる山としてピーク二十九(七八三五米)ヒマルチュリ(七八六四米)三峰を有している。東はブリ・ガンダキ川を距てゝガネシュ・ヒマール(七四〇六米)山群に對し、西にはマルシャンデイ川の彼方にアンナプルナ・ヒマール山群更にダウラギリ(八一七二米)の大物が高聳している。

一九五〇年フランス隊が「最初の八千米」をものにした同じ年の同じ六月に、ヒマラヤのヴェテランであるティルマン氏の一隊が、アンナプルナ山群に登山を試みた記錄は會報一五五號に述べられているが、その時ティルマン氏等はマルシャンデイ川に沿つて北上しまずマナスルゥを偵察して、次のような記錄をのこしている。「五月十日にカトマンズを發し、十日目には高度六〇〇米に降下し、十三日目にトンジェの部落に達した。そこはマルシャンデイ川がアンナプルナ山群の背後(北)に西折する所で、高度はまだ一八〇〇米しかない。マルシャンデイ川はネパールのほかの川と同樣にヒマラヤ山脈の北側(併しラダク山脈の北ではない)に源を發し、深い峽谷となつてヒマラヤを貫流する。トンジェの下方でこの峽谷の東側には尨大な南支脈が聳立しているが、その山脈上にはヒマルチュリ、マナスルゥ及び七八〇〇米の一峰が在る。われわれは、これら三巨峰の驚嘆に値する光景を堪能したが、その報告をかくに先だち四日程トンジェにパーティを駐留して、北方から間近にマナスルゥを觀察するためゾウド・コーラの谷を登りつめた。



マナスルゥの絶頂は相當遠くに位しているが、どれが絶頂であるかの活潑な論議がまだおさまらないうちから、マナスルゥを試みようとする私の興味は失われた。と云うのは、その北山稜は目前に約七八〇〇米の一峰を高聳せしめ、一旦三〇〇米許り降下して、更に頂上の廣い臺地へ向つて急激に隆起し、絶頂はその遙か彼方に聳えていたからである。」

ティルマン氏は更に語をついで「こゝからのルートの莊麗さと且又疑いもなく困難さとは、われわれ登山者を強く引きつけるに違いないが、若し此の山の高度が實際の半分のものであつたら、私は本當に引きつけられたかも知れない」(A.J. vol. LVIII, No. 282)と云つて漸く肉體の衰え出した自身(彼は既に五十を越えていた)に不當のアドヴェンチュアを戒め可能性の多いアンナプルナ山群を目指してマナスルゥに別れをつげたのである。

マナスルゥに關する恐らく唯一の記錄とも見るべきものには、叙上のように見えているので、マナスルゥの手強いことは縷説の要がなかろう。

從つて會の計畫はあく迄愼重を期し、本年の先發隊に課せられた任務もマナスルゥを能う限り偵察し、次回の本隊のために可能ルートの發見に第一の重點がおかれているのは勿論であるが、一方ネパール・ヒマラヤのように未だ探檢の必要がのこされている山岳地帶であるから、その方面でも多くの收穫を期待している。

踏査コースとして豫定されたも

登山用具の專門店
好日山莊
プライスリスト進呈
東京店 海野治良
中央區銀座西二ノ五 電話京橋(56)3600
大阪店 西岡一雄
北區堂ビル前協和銀行三階
神戸店 島田眞之助
生田區三宮町一ノ三二ノ一

エヴェレストのテンドルブ

わが友リオンに

☆

計主　田邊

一九三六年のエヴェレストへのエクスピディションを述べたヒュウ・ラトレッヂ氏の「アンフィニシド・アドヴェンチァ」の巻末にある六三枚の寫眞のうちのブレイト三二のベイス・キャンプでの隊員一同の寫眞を見る人々は、まず前列のまん中にいる一匹の黒いチベット産マスティフ種の犬が目につくことだろう。（ベイス・キャンプを設けたのは四月二六日であつた）。中段の中央にラトレッヂ、その右にジョン・モリス、ウイン・ハリス、左にスマイス、シブトンなど、われ〳〵には親しく知られている人々が腰かけているのであるから「犬に、まず氣がつく」などというのは犬を好きでない人々には通じない言葉に相違ないし又この話全體も面白くないかと思う。その犬の樣子が普通ではないから、まず「オヤ」と思うのである。犬はラトレッヂ氏の前にウイグラムの膝を枕に目をとじて、ぐつたり、もたれている。それをウイグラムは兩手で抱いている。その兩側に坐つているガヴィンもケンプソンも笑つている。もう一人笑つているのは後列に立つているビイ・アー・オリヴァであるが、テンドルブはそのオリヴァの犬である。人々は寫眞の説明によつて納得する。――「テンドルブは熱さに惱されているようである」。なるほど日は暖かくあたつているようではある。しかし、ウイグラムやケンプソンはキャンプ用の毛皮の暖かい長靴をはいているし、ガヴィンとスミス・ウインダムはハイアルティチュウドでの登攀衣を着て平然としているのだが。

さて、最後のブレイト六三で再び一行一二人の寫眞に接する。一行がエヴェレストからの歸路、チベットから北部シキムに入つた日にとつたものであるが、前列の中央に再びラトレッヂ、その前にテンドルブがいる。ラトレッヂの手が犬にふれているようにも見える。今度はテンドルブはカメラの方を正しく見ている。

私はインデクスでTendrupをさがした。正にその名はあつた。六二頁、七〇頁、一三九頁そして一四五頁にこの犬の事は出ている。

まず六二頁――タングでオリヴァはチベット産マスティフ種の若い犬「テンドルブ」を買い求めて、つれて行く。タングはティスタ川に沿つた處にある。行手、シキムとチベットとの境にチョミオモ、右の方東北にカンチェンジョオ、バウフンリが聳えている。「テンドルブ」、カッコをして「熊」と書いてあるから熊という意味なのであろう。テンドルブは性格の強い、しかもセンス・オヴ・ヒュウモアを持つた犬であるが、また、それが身についている。オリヴァに夜なんか、むやみに吠えないようによく仕込まれるのだが登山隊の貯藏場なんかを下手にうろついているチベット人こそ飛んだ災難だつた。テンドルブは闘志滿々、ほんとの敵がいない時には、戯れに、隊員たちに挑戰するのだつた――常に備えよとばかりに。

七〇頁。シェカル・ゾンに一行は到着。そこのゾンペンをランチに招待して宴會を開く。遠征隊のコツク主任チマン・チュンは一向腕が冴えない。ジョン・モリスは「どうもチマン・チュンという名は繼切りの別名に過ぎぬのではないか」などと言う。この宴會の光景にテンドルブは逆上して二人のポーター・メスメンを嚙んだりして、ひどく面目を失つた事もある。一行はシェカル・ゾンから南下して、いよ〳〵エヴェレストへとりかゝる。

一三九頁あたりでテンドルブは最も旺んである。この時も貯藏箱をのぞきこんでいるチベット人の後方から、ひそかに近づいて行つていきなり襲う。但し、要領のいい處へ、程よく一撃を加えたのだつた。チベット人が仰天して空へ飛び上るのを見て、尻尾をピンと上げ、意氣揚々と立ち去る。顔には一ぱいに笑をたゝえていた。というのである。

このようにテンドルブは隊員と共にタングからチベット高原の長い旅を續けシェカル・ゾンからベイス・キャンプへ進んだ。そして六月一七日歸路につく、カンバ、ゾン、タング、ガントクを過ぎてカリンポンへ來る。その次のダーヂリンで一行の旅は終るのだつた。

そこで一四五頁の記述になる。カリンポンでこの個性（オリジナル）のある又愉快（アミュジング）な犬テンドルブはラジヤ・ドルジュのうちこそは自分の落着く先と考える。そして、そこへ入つて行くのだつた。――これが終局のさだめだというような顔付

＝三頁より続く＝

のは、モンスーンあけに近い九月上中旬カトマンズを出發し、マルシャンデイ川に沿つてタグランの部落からまずマナスルゥ及びヒマルチュリの南面を調べ、ついでトンヂェの部落へ北進して一旦西折し、マナングボトから一九五〇年のティルマン隊がとつたルートにほゞ從つてアンナプルナⅣ峰（七五二五米）をうかゞい、更にトンヂェに引返して再び北へ溯行しマナスルゥの北方主稜を乘越し、この間北方からの偵察を行い、北側のサマに下り、東面の偵察を續行しつゝブリ・ガンダキ川に沿つてニャヤク、ジャガトと下つてきて、十二月中旬頃カトマンズに戻り同月末歸國の豫定で、ラウンド・マナスルゥとも云えるようなコースが樹てられたのである。尙今西隊長、中尾兩氏は夫々專門の學術探檢も途上併せ行う手筈になつている。

先發隊が同伴するシェルパに關しては、先般西堀氏渡印の際ダーヂリンのヒマラヤン・クラブ支部を訪れ、親しくシェルパ達に面接して來たので特に便宜が與えられ優秀なシェルパが三名參加するがその中にはフランス隊に從つてアンナプルナへ赴いたサルキが加わることになつている。

委員會は早速明年續いて行われる本隊の準備にとりかゝるのであるが、今後共會員各位の熱誠な御支援協力を期待するものである。今回の先發隊派遣に際しては、隊員中三名が京都在住の者で東京との連絡に不便があつたことゝ、準

で。正に、これに間違いはなかつた。明らかに、彼は、ジャンドラの暑い渓谷でオリヴァと共に暮すことは自分には適さないことを豫知していたのだつた。この地、カリンポンには彼にとつて快適な氣候と住みよさとがあつたのだ。テンドルプ、この犬は實踐的哲學者だ。（オリヴァは當時ジャンドラのサウス・ワジリスタン・スカウトに勤務していた。）

ラトレッヂ氏は一匹の犬についてこのように述べて來ている。

なお、一九三六年のエヴェレスト・エクスピディションは豫期よりも早く始まつたモンスウンのために惱まされ、引上げたものである。モンスウンは五月二三日にエヴェレスト地域に來襲した。そしてこのエクスピディションでは—六月六日の事だつたが—シプトンとウイン・ハリスとが雪崩にあつて、危く助かつたりしている。

附記——私は今年のはじめに九年六ケ月ぶりで再び犬と共に暮すようになつた。「わが友リオン」は甲斐産のしば犬である。

正誤 會報一六二號「アンナプルナ、最初の八千米」の中、フランス山岳會の所在地がパリのラ・ボエチイ街とあるは、ラ・ボエシイと發音する。尙、その山岳會の「やゝ陽氣な大きなサロン」とあるは「やゝ陰氣な…」の誤植。最後の方で高度用一組（une unité altitude）の内容の中の「シート若干枚」とあるは「食器一揃」と訂正。右御注意下さつた藤島敏男氏に感謝いたします。深田久彌

ヒマラヤ遠征への溫床

★「大興安嶺探檢」所見★

加納一郎

今日の登山家のなかには高さがせいぜい一五三〇m（オオコリドイ）にすぎないような山脈への行動には、さして興味をいだかない人も少くないかと思われるが、京都大學が一九四二年に試みた北部大興安嶺縱斷の探檢は、探檢と名づけるほどのものゝまことに少い近頃の日本としては、きわめて顯著なものであり山登りに心をひかれるものが決して輕く見すごすことのできないものである。

登山のうちには高さへの意欲と同時に未知への働きかけのあることは否定ができない。既登の峯に對してヴァリエーション・ルートが求められるのは明かにその證左であろう。京大のこれらの人々も、その頃ヒマラヤの勉強を怠つていたわけではないが、當時ゆるされる行動の範圍のうちで、自然の空白地帶を北部大興安嶺に求めて入つて行つたのである。室蘭から稚内にいたる距離に相當する無住地帶を六十四日にわたつて食糧自給で行進したという點だけでも、近頃の日本人の記錄としては稀なものであるが、それよりも探檢の成果がまことによく總合され統一され、行きとゞいた仕上が加えられている點を私は特に注意したい。かつて總合調査隊だの學術調査團だのが行動したことがあるけれども、そして何がしかの報告が出されているにはいるが、今度の「大興安嶺探檢」のようによくまとめられたものはほかにはない。實に著書として申分のない立派なものである。

この報告書が刊行されるまでには、ずいぶんと苦勞をつまれた樣子で、ついに十年の歲月が流れてしまつたが、しかし反面から見ると、そのころ今西隊長の他は、隊員はみなまだ學生であつたのに今日ではそれらの隊員の多くは大學の教授となり、一人前の學者にまで成長され、そのあいだに探檢の成果が檢討され練りに練られて、こゝに結晶したものであり、この意味でも、若い登山者に少からぬ刺戟となるのではないかと思われる。

「山日記」の探檢關係圖書のなかには日本人のかいたものとしては白瀧の「南極記」と河口の「西藏旅行記」の二つしかあげてないしかもこの二つとも科學の面から見るとまことにはずかしいものであつたが、今日になつてようやくに世界のどこに出してもひけをとらない「探檢記」としてこの一本をえることができたのは喜ばしい限りである。自然科學の分野で第一級の内容をもつているばかりではなく、探檢行動の細叙にあたつても吉良、梅澤、川喜田氏はじめ分擔執筆者のみながみな立派な筆の持主であつて、紀行文としての文學的價値において、われわれ山仲間の誇りであつた大島亮吉の「山、研究と隨想」にもまさる出來ばえであると私は思う。

今度のヒマラヤに興安嶺のメンバーが一人も加わりえないのは殘念だと感慨深い便りを殘して今西博士はネパールに向つたが京大を主流とする今回のネパール・ヒマラヤ探檢はこの「大興安嶺探檢」を温床としたものであるとも見られるのである。山は低いがこの本から學びとる價値は高い。森林や河流や動物のことに興味をもたない登山家でも、オオコリドイ登攀の一章にぜひ眼をとおして、今西隊長の登山ぶりを知つておくのも無駄ではなかろう。

會費をお忘れなく

二七年度會費未納の方は至急拂込んで下さい。東京支部會員は八〇〇圓、地方會員は六〇〇圓です。

備期間が極めて短かゝつたことのため、準備の掌にあたつた事務局部員の努力は文字通り筆舌につくせないものがあつた。日本山岳會はいつもの時代にも、このような黙々として後楯になる會員を少なからずもつていることを誇りに思い、これなくしては立派な隊が出せないことを知るのであるが、この計畫の遂行途上にあたつてあらためてこゝに思いを至し、會員各位と共に滿腔の謝意を表したいと思う。

ヒマラヤ委員會

Château Brillant

山頂で　山小舍で

アルペンの氣分が滿喫出來る

純フランス式高級ブドー酒

サドヤ釀造場　甲府市御納戸町

（現品は山岳會ルームにあります）

紅たまご

島田巽

ヴェニスからツェルマットとは我ながらあきれ果てた旅程だつたと思う。海抜一米程度のヴェニス、時に高潮ともなれば逆に水面下一米位にさえなる水都から、翌日の夕暮、一擧に千六百米のツェルマットへやつて來た時には不思議な氣がしたし、次の朝、三千百三十六米のゴルナーグラートでワリスの山々を觀望したときにはまるで夢のような氣持だつた。といつて飛行機で飛んで來たわけでもなく、復活祭の混雜で夕方ヴェニスの宿を逃げだして靜かなヴェロナに泊り、翌朝の急行でミラノに出て、乘換時間を利用して大伽藍の横にあるバラッツオ・レアレで開かれていたゴッホの展覽會を大いそぎで覗いた上、バーゼル行きに乘つてシムプロンを抜けスイスに入るといつた行程を辿つて來たのであつた。

この一年、急ぎの旅にはかなり慣れ、ことに飛行機の旅となると全く一昔前には想像もでき兼ねた經驗を度々重ねたわけだつた。イスタンブールのホテルで朝食、アテネの飛行場で晝食、晩飯はゆつくりローマでといつた風なことが日常の茶飯事のようになつていた。松方さんと一緒になつたときも、グリンデルワルトのエミール先生のところで、うまい朝飯をたべ汽車でベルンに出てアールの流れに浴したシュウエレンマッテリで晝を濟まし、午后のお茶どきにはロンドンへ飛んで歸つていたというわけだつた。

そういつた旅が珍しくはなくなつていたのだが、ヴェニスからツェルマットまで來たことはひどく私を喜ばせた。スイスの山々を胸にかけた先輩たちからすれば何でもないことであろうが、ともかくマッターホルンにお目にかゝれるという機會に惠まれては、私としてはワクワクせざるを得ないのである。何度讀み、何度聞いたか數えきれぬほどのマッターホルンである。

もう十日近くも續いた快晴なので、そろそろ崩れ出しはしないかと恐る恐る開いたホテル・モン・セルヴァンの窓から、まだ曉光を浴びない白い巨人を眺めたとき、本當にホッとした氣持だつた。ゴルナーグラート行きのバーンは復活祭休みの最後の日なので豫約券がないと斷わられるほど一杯、リッフェルベルクにも澤山のスキーヤーが遊んでいる賑いだつたが不思議なほど騷々しさがない。

さすがにゴルナーグラートの展望はすさまじい程美しいものだつた。黒眼鏡でもまだまぶしい程の午前の太陽の下にワリスの四千米級がずらりと並んだ壯觀は、息をつまらせるという形容が誇張でなく使われるといつたものだ。マッターホルンの雲一つかからない山容を眺めながら、「頂上まで行くつもりはなかつたんだが、登つているうちに行つてしまつてね」とロンドンの宿で單獨行を語つた伊藤愿君のことなど想い出しながら、一月近くもスイスにいることの出來た彼を羨しく思い、二日後にはこの風景に

飯豊紀行

神谷恭

梅雨明けの去月十八日上野發夜行で、待望の飯豊山へ行つて參りました。相棒は會員牧野君。翌朝九時磐越西線の德澤下車、バスで終點極入（ゴクニュー）へ十時半着、それから二里奥川最奥の彌平四郎（ヤヘシロー）着は十四時でした。開山前とて山中には未だ小屋掛していないというので、豫て人夫を依頼してあつた山城屋（赤城一也）（オクラ）へ宿泊、翌曉人夫の小椋新次及宿の主人一也君と出發したのは四時二〇分。彌平四郎は昔平家の落武者に依り拓かれたという戸數四〇、未だ電灯も無く木地師と耕作に依つて暮らしている寒村ですが、小供が多く殊に婦女子の顔立が整い上品なのは意外でした。

五時半祓川に着いて朝食、六時新長坂という文字通り長い登りに先ず一汗かいて七時半御澤への乘越で一息入れる。澤は殘雪に埋まり冷風を吹上げて來るので寒に涼しい。地圖の徑は澤へ降つてから三國岳へ取付く樣になつているが、現在この徑は通れず疣岩（イボ）山南東面御澤の源頭を暫く搦んで、三國岳へつゞく尾根の一端、雪田や御花畑の在る氣持のよい平へ出て、偃松やシロバナ石楠花の混生する間を舊道に合するのです。途中東北大山岳部の一行の下山するのに逢いましたが、雨のため八日間降りこめられ今日漸く下つて來たということでした。

三國岳頂上の小祠、箸ノ王子へ着いたのは十時で開山期はこゝに小屋が建つそうで、傍に建設資材が積んでありました。是からの徑は地圖に示す通り、山稜傳いで上下多く仲々疲れますが、ニッカウキスゲ、ヨツバシオガマ、クルマユリ、シラネアオヒ等咲き亂れ高山蝶が飛び廻る。牧野君は一六ミリやカメラの撮影に其上捕虫網迄振り廻すのだから仲々忙がしく、從事時間もかゝり、切り合せという米澤道の合する眺望の良いところで中食。

併し實（サネ）川谷から這い上る雲霧は豫て樂しみにしていた大日岳方面を全く隱して仕舞つた。零時半出發、草履塚（一九〇八米）姥小會を經て御秘所（ゴヒシヨ）の檢も大した事なく、御前坂という最後の登りで少々アゴを出し十四時漸く頂上の東端、堅固な岩石に圍まれた本社へ到着しました。併し牧野君は務め先の都合で一服する暇もなく彌平四郎へ下山。寂びしく友を送つた後、獨り三角點附近を散策しましたが霧に包まれ眺望皆無です。偃松に混るシロバナ石楠花と砂地に咲く

さよならする自分のこと、どこへ登るという暇もなく、慌ただしい平地旅行の合間では、にわかに取付くわけにも行かぬ狀態を心殘りに感じたりもしたのだつた。

しかしまだ四月、春雪とはいえ今年の大雪のお蔭で廣々と擴がる白一色の斜面はそれだけでも充分に樂しいものだつた。「今どきアーノルド・ラン派とは珍しい」とマッターホルンが笑い出しそうな古典的迫轉で、山々が自分の方へ迫つて來る感じを樂しんでは、時おり頭を雪上に出している岩をみつけてスキーを脱いで、トカゲをしたり、煙草をふかしたりといつた一人旅らしい怠惰を存分に發揮した。午后の強い陽光にブライトホルンから鈍い雪崩の音が聞え、雪煙のあがるのを眺めたのもこんな一時であつた。

スイスのホテルで作つて呉れる辨當はいつも樂しみの一つだが、この日も岩に腰をおろして食べきれない程のサンドウイッチやチーズを取出し、オレンジは食後にと雪の中に冷やしておくことも忘れずに喰意地を張つたのであつた。紙に包んだ卵の一つも出て來たのだが、包紙を開いたとき私を驚かしたのは、紅色も鮮かな卵の現れたことだつた。まさかこんな復活祭の卵を三千米の山上で食べる日が私の生涯にあろうとは今の今まで想像もしていなかつただけに、想わず私はニヤリニヤリとひとり相好をくずしたのであつた。もし人が見たら少々頭にきているなと思つたに違いない。だがこの紅たまごのなんと美しく見えたことか。スイスからイタリアへと擴がる青空と白一色の峯と氷河、その中にたつた一つの可愛らしい紅色の小楕圓、これこそ本當の紅一點であつたし、なにか堅牢な紅の寶石類のようにさえ感じられたのであつた。

翌日、私はゼッセル・バーンでウンター・ロートホルンの中腹まで運んで貰い、ひとりスキーでフィンデルン氷河を右に見下しながら、凍つたステリゼーの傍を通つてフリューアルプの邊りまで遊びに行つた。リンビッシュホルンやストラールホルンは私が樂しみにした程は、よく見えなかつたが、マッターホルンの北西側にあたるツムットとティーフェンマッテンの二つの氷河を眺めることが出來たし、その歸りにはワイスホルンも間近かに樂しむことが出來たのは嬉しかつた。

このフリューアルプの山莊を中心にスキー登山を樂しんでいた親子四人のスイスの人たちと話しながら折角こゝまで來て碌に登る暇もない悲しさ、それにさてまたいつ來られるかも知れないしといつたことなどを嘆いたりしたが、すつかり雪燒けした若い娘さんは、慰め顔に私にこういつて呉れた。

「マッターホルンに登つた一番の年長者は七十五才のイギリス人ですよ、まだ、まだ大丈夫——」

さて私は、その頃までにでも、もう一たび、このすばらしい山を樂しみに歸つて來る時があろうかと考えながら、心細い想いでツェルマットへ降つて行つたのであつた。

望展上山

官尊民卑の封建思想が未だに而も山の中にまで殘つているとしたら、これは正に驚くべきことだが、その實例がこの夏、谷川岳の肩の小屋で見られた。

國立公園になつた谷川岳に觀光關係のお役人が視察などの用務を帶びて登つてくるのは、敢えて不思議ではないが、この公僕たる課長さん一行が、二階を占領して一般の登山者たる人民どもを一階の土間に寢かせるなどは感心しかねる。お互いに窮屈でも讓りあつて愉快な一夜を送るべきだ殊に地元の縣側から見れば登山者はお客樣である。その觀光客を土間に寢かせておいて、自分たちだけが快適な座敷を占領しているのでは文字通り主客轉倒だ。

千島キキョウも美しく殊にミヤマウスユキソウは夥しく、廣大な雪田の上を疲れも忘れて駈けめぐりました。この間に新次が夕飯の仕度をして呉れたので彼と共にウイスキーの杯を重ね暮れゆく山頂の靜寂を心ゆく迄味いました。翌朝の御來迎は實に素晴しく磐梯山は雲海を抜いて浮かび、前日遂に姿を現わさなかつた牛首、大日岳、西ケ岳から烏帽子、石コロミの頭、地神山等の連山は夥しい殘雪に輝き一遍に眼が醒め朝食も勿々に大日岳へ登りました。

徑は諸々雪田に覆われ、草原にはチングルマやハクサンコザクラが群落をなし、今が盛り、大日の直下文平池が見える邊り迄來て、新次が大熊の足跡を發見し、昨夜池の水を飲みに來たのだと云う。九時頂上、正午頃小屋へ戻り中食後考えたのですが、小玉川温泉に降り小國驛へ出る豫定が獨りになると急にファイトを失い、平凡に川入に降り、一ノ木經由山都へ出て歸る事に一轉、早々に荷を纒め一三時頂上を發ち、三國岳迄は往路を辿りましたが昨年飯豊山開發振興會で拓いた新コースが三國、大瀧間を四〇分、大瀧、川入間を一時間と同會發行のパンフレットに記載されてあるのを迂濶に信頼し、舊道に比べ二時間も短縮される譯ですから新次も一度通って見たいというので一五時一五分三國岳を出發この新コースを降つたのでした。始めの裡は切明けも廣くはつきりしていたのですが、やがて怪しくなりそれに傾斜は益々急で息つく場所もなく、一六時四〇分漸く御澤の雪渓上に降りつき、右岸について十五分も行くと三〇米餘の瀧が現れたので之が地圖にもある大瀧かと思いましたが間もなく下流に約一〇〇米許りの立派な瀧が現れたので、之こそ大瀧である事が判つたのでした。この直下に鐵山の堀立小屋がありましたが無人で邊りは一面の雪塊に覆われ徑は全く跡片もなく破壞されているため架橋工作を施し漸く危地を脱し、川入からの本道に出ましたのは一八時、そこから川入の飯豊鐵泉迄は更に四五分を要しました。湯は茶褐色を帶び胃腸病と神經痛に特効ありというのですが、浴後イワナの鹽燒で一杯傾けた乳白色の液體こそ夫れ以上の効能がありました。食後宿の主人に新コースの甚だ危險なるを語り、今後完全に修復せぬ限り登山路として不適當なることを強調して置きました。

翌朝は九時出發、新次と一ノ木で別れ同地發一一時のバスで山都着が一二時一〇分、同驛發一二時四五分の上りに乘車、郡山で仙臺發の青葉に連絡、同夜九時歸京致しました。

（27・8・10）

鳥海山の近況

チョウカイアザミ

後藤　幹次

七月は天候が不順で豪雨が多く鳥海の現地視察も延び〳〵になつていたが、八月二日から地元役員の講習會も兼ねて東都からヒマラヤ偵察隊の出發を間近かに控えて大多忙を極めている藤井、林兩理事に強引に來て頂いた。

餘目驛近く河原宿邊から雲にかくれている鳥海山を車窓から眺めて天候の恢復を祈つたが、酒田市役所で小憩していると又しゆう雨がやつて來た。未だ本格的に上つた天候ではない樣だ。

講師の新村正一氏と講習員は一足先きにバスで上草津經由で出發。今日は河原宿泊の日程だが出發が二時近くになつたので心配。

視察團は新潟、福島から藤島、伊藤、兩支部長、地元から石川、齋藤清吉君が加わつて、市の車の外に一豪傭上げて三時出發。吹浦の國道を六ツ新田から右に折れて蕨岡へ。南鳥海驛までバスでは一方交通になりはしまいかと思われる道だが驛からは道路の幅員を廣げており近く完成すると云う。蕨岡村役場に聲をかけたら今消防自動車で追いかけるから山に登つて神社社務所で小憩していてくれと云う。

酒田から丁度一時間、四時半から村長さんや村の有力者と懇談。國體の時はバスは駒止まで。荷物は横堂下のソブ谷地まで確實に約束するから選手役員全部を蕨岡口本道のソブ谷地經由にしてくれと村長さん。最初の計畫では河原宿白糸班の選手は初日の重裝備で脚の長い河原宿までは、一寸可哀想と思つて杉澤から新道を通つて上草津經由湯ノ豪までバスを上げる豫定だつたが、駒止の停車場を廣げることと、ソブ谷地間の通路の改修を確約して決定。白糸瀧の新設山小屋もこの天候不良で材木の荷上げが遅れて中旬に出來る豫定が下旬になるとのこと。山小屋での食事は是非新鮮な日本海の魚を食べさせたいと心配している。

その他次々と議事は進行して行つたが又雨が來た。心配していた講習の方も雨で湯ノ豪泊と電話連絡がある。

社務所の戸を全部開け放しで寢たが蒸し〳〵した寢苦しい一夜だつた。未だ薄暗い中から日暮しのやかましい聲で眼をさました。日暮しの聲で起されたのは二十幾年か振りだ。又々朝から豪雨で出發が一時間も遅れトラックで八時駒止へ。連日の雨で道路は最悪のコンディションだが杉澤を過ぎた新道は砂利を入れゝばO・K。心配した程のこともなく進んだが元鳥海道場に入る開拓の下の急坂の猛烈な空轉でタイヤがイブり出したのには驚かされた。がみんなで引止り上げて豫定通り三十分で駒張着。

西の海も明るくなつて雲も大分上りかけたが未だ風が北に廻らないので今日はグヅツいた天氣模樣とか。ソブ谷地までユックリ二時間、トラックが上つた跡があるが大分改修が必要だ。ソブ谷地には新設小屋の材木が大分上つていた。三十分で急坂を横堂に登る。オレンヂ水一杯とパンで早晝。晴れ上つた庄内平野を見下したのも束の間ガスに包まれてブナの密林をボソ〳〵登る。

西物見に來て急に開け、吹き上るガスに久々で山の涼味を感じる。八丁坂にかゝる豪地から折れて白糸瀧の瀧音を聽いて谷に一寸下ると未だ瀧から續いている雪渓尻に出た。川柳が漸く芽を出した渓流に沿つて下ると人夫達が冷たい凍る樣な水の中で砂利取りに懸命である。

藪を切開いた道を又渓流を渡つて一寸豪地に登ると立派な飯場の側に實にスバラシイ厚い石疊の基礎が出來上つて五六人の人達が忙しく働いていた。ホテルになる場所の下が二間四方地下室も便所も出來上つていた。周圍には附近から切出した石の山々、これで屋根まで厚い石疊で木造の山小屋を圍つてしまうのだ。完成したらスイスの山小屋にも劣らない立派なものが出來るだろう。鳥海の頂は見えないが白糸の瀧を窓から眺めたり、ポーチから東南の山々を大豪の谷を隔てゝ樂しむ春、夏の山小屋の生活も愉快なことだろう。

飯場で小憩して働いている人達をはげまし、慰めて出發。高山植物の今を盛りに咲く八丁坂を登つて三十分の豪地に着くともう河原宿は直ぐだ。

ガスに包まれた河原宿の小屋に荷を置いて、少し行くと渓流の側の豪地に講習員は思い〳〵に幕營を終つて休んでいた。今年は雨が多いせいか「ニッコウキスゲ」の

第七回国體鳥海山のお歸りには

湯ノ濱温泉　鶴岡驛より電車30分

湯田川温泉　鶴岡驛よりバス30分

温海温泉　温海驛よりバス5分

群落も實に淋しい。

夜明からの豪雨でテントの連中は又大騒ぎ。そして小屋にも長雨續きで薪が不足したので早朝に講習員達は近くに薪取りのアルバイト。そして七時に元氣で出發。

長い心字雪の大雪路を登り乍ら去年の春この一行とこの邊の頭から別れて一氣にスキーで横堂まで下つたが、たつた三十分だつたなどと思い浮べながら小雪路に渡り突端まで登つたら仙ケ洞の上で一行の人聲がする。皆は新村氏の指導で新コースを開拓し乍ら指導を受けている樣だつた。我々はアザミ坂を藤島氏や伊藤氏から高山植物の名を聽き乍らさしもの急坂も忘れて樂しく河原宿から二時間で伏拜岳に着いた。外輪山は風がある時はひどいが今日はガスの中を散歩氣分で行く。行者岳の岩場には頑丈な鐵梯子や鎖があるが今度の國體では雪になれば内輪のヘズリが悪いので虫穴まで行つて神社に下ることになるだろう。神社で晝食をして講習員の來着を待つ。神官達は石が乾いて來たから間もなく晴れるだろうと云う。

一行と共に新山に登る。案外堅い岩峯が幾つもあるので外輪の岩場をむりして登降するより新山で岩登りをやつた方が面白いと新村氏等が太鼓判をおす。頂上で晴間を待つたがガスが時々切れるだけで仲々待遠しい。新村氏と林氏が近くの一つの岩峯を和製のラバーの登山靴で樂しむ。晴れそうもないので裏から七高山との雪路に下りて神社に歸り一行を先きに歸して晴れ間を待つて周圍の外輪山の内壁を見るべく神社の前のイワブクロやイワギキョウ等の咲き亂れる廣場でトカゲをきめ込む。

一時間ばかり待つたが時々新山の頭や七高山、虫穴邊まであくが遂に千蛇ケ谷や伏拜邊の内壁は姿を見せない。三時も過ぎたのでとう〳〵御輿を上げて虫穴に登つて七高山に行き四時半頃歸途につく。

河原宿邊は漸く晴れて幕營の一行は久し振りでテントの内外を乾して夕の炊事に忙しい。

五日は舞れたらもう一度登つて、千蛇ケ谷を見る豫定だつたが舞れそうもないので河原宿から直接御濱に抜ける新コースの視察に變更した。

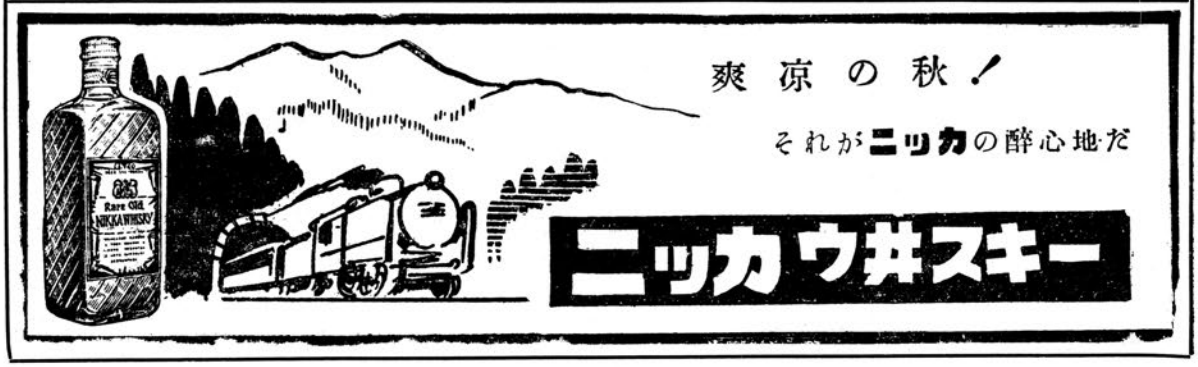
朝講習員の一行と別れて河原宿の裏から岡を越えて月山森の右腹をからみ幸次郎澤に降る。御坪附近は殘雪と高山植物が咲き亂れて奇麗な春の庭を歩く樣だ。幸次郎澤は昔は歩いたそうだがコケむした大岩石の連續の急な谷だ。千丈ケ原の一端にとつついて、なだらかな氣持良い草地を三つ、小澤を越えると二の瀧遊佐口に出合い又一つ越えると萬助道に出合う。空は漸く晴れ上つて外輪の一端まで眺められる。

新村氏は鳥海は想像より案外に廣くて良い山と幾度もほめてくれるがこの天氣では苦笑せざるを得ない。この谷は春は扇子森から氷河の樣に落ち込んで下から眺められるがスキー滑降待望の地である

又鳥ノ海までトロ登りで湖畔をからんで御濱に着いたのが河原宿から約三時間。早晝をしてユックリ休んで愈々吹浦までの降路につく。大平までの石跳び、蔦石坂の急坂全く何時も乍ら長いいやな所だ。大平の新設小屋は石積みが白糸より少々遲れていたが材木は大部上つて駒止からの板材が上れば全部とのこと。冬の風雪の關係上展望は白糸に劣るが積雪期登山とスキーの前進根據地には最適の處だ。人夫達を激勵して道を急ぎ駒止手前の夏茶屋で白玉なる甘い物を食べていると又々スゴイしゆう雨がやつて來たので一時間ばかり雨泊りして駒止に着いた。吹浦村役場に前々連絡して置いたトラックを營林署の造林小屋から電話したがどうした行違いか立派な道路が出來ていながら結局營林署のトラックと陣屋から道路工事のトラックを乘繼ぎしてくれたとのこと。營林署のトラックは陣屋に下りているので又歩き出す。山道と違つて十日には高松宮樣がこゝまでお成りと云うので急に砂利を敷きつめ漸く完成した立派な新道だが全く歩きにくい。陣屋には營林署と工事用のトラックが二臺あつたが連日の豪雨で下の道がやられているので駄目。濡れたついでと半ヤケ氣分で雨中を又々飛ばし吹浦六時二十八分發の汽車に漸く間に會つてほつとする。然し視察員の各位には全く申譯なかつた。

以上赤裸々な報告をして國體の參考とするが吹浦、巖岡兩口とも兩村の努力でパスは駒止まで上り、新設の兩山小屋も八月一杯で完成、既設の山小屋もそれ〴〵補修して國體を待つ次第である。然し六ケ所の山小屋や山の鎖桑などに宿營して各地に分散するのでその設營、通信連絡に無駄、有線を利用し人員配置に苦勞が多いのが第一の惱みの種であり良き成果をもたらす可く鋭意努力している。又天候は冬型に向うくずれ安い天候で中腹は紅葉、六七合目以上は雪、又は新雪が必至であり頂上附近は氷雪も見られるのではないかと思われるので富士に次ぐ技術を必要とし裝備にも萬全を期して用意せられたい。我々は何も出來ないが全國の岳人が初冬の鳥海に眞劍に取組んで頂ければ望外の幸である。

地元酒田市、巖岡、吹浦の兩村の皆んなも充分なことも出來ないにしろ心からの誠意を以つて暖かい歓待に非常に努力せられている。どうぞ全國の選ばれた岳人の多數來て頂くことをお待ちしている次第である。



ウエストン師の碑前にて

日高信六郎

私がはじめて上高地に入つたのは大正三年燒岳噴火の前年であつた。その頃ウエストン師は横濱に住んでおられ、私どもの山仲間の大木操君(前東京都副知事)がとつた河童橋上のウエストン師夫妻とその傍にうずくまるお伴の嘉門次の寫眞は、日本山岳會の講演會で披露されたことがあるから見た人も少くないと思う。

大正六年に來たのを最後として私は久しく日本の山谷に遠ざかつていたから、一昨年このウエストン祭に參つたのは、實に三十三年目であつた。上高地とその山や谷はすつかり開けて私を面喰らわせた。然し變らぬものはこの周りを圍んでいる山や岩や樹や水や空であつて、これらは昔ながらにわれわれを迎えてくれる。中でも溪と森とはわが國の誇りとも云うべく、外國の山水を見なれた後では尙更しみ〴〵とそのよさが感じられる。

穗高は美しく氣高く、その岩場はすばらしい。ただ今一息というところで高さが足らぬのは惜しい。これにせめて五百メートルでも足せたらという嘆聲が出る。

私は日本の山を愛護せよと云い度い。

歐州アルプスなどの高い山はいかつくて、見ただけでも人を威壓するし、その凄さが素人眼にもわかるから誰でも不用意に山に入る氣になれないし、簡單に山をいじくりまわしてやさしい山にすることもむつかしい。然し日本ではわれわれが山を護り山を育くみ山を恐れていなければ、「高さの足らぬ山」を「低い山」にしてしまう惧れがあるのみか、つまらぬ遭難事件のあとを絶たないことになる。

またこの美しい溪谷や森林が愛護されなければ、日本の山岳美の大きな要素が駄目になつてしまう。

かと云つて、私は少數の山好きの仲間だけで山を獨占せよと云うのではない。登山家は獨善的排他的であつてはならぬ。「ギド・レイ」が云つたように、山は萬人に屬するものだし登山の普及は悦ぶべきことなのだ。然し山を俗化してはならぬ。そしたらわざわざ山に入る意味はなくなつてしまう。

われわれは何のために山に登るのか、この議論は古來絶えたことがなく、今日でも各國山岳會の會報を賑わしている。突詰めて云えば「山に登りたいから登る」、別の言葉で云えば里を去つて山へ、複雜な文明生活を離れて單純な原始的生活へ、というのではあるまいか。

だからいつも山の中にいて單純な原始に近い生活をしている人ほど、なぜくるしんで山に登るかわからないと云うし、文明が進み科學化や合理化が進む程都會人は山谷を戀うのである。

昔のことを考えて見よう。大むかしは山を恐れて寄りつかなかつた。山に入つた最初の人たちは、鹿や羚羊を追う獵師か、靜寂孤獨を求める行者高僧であつた。ラスキンなどは山を下から敬仰した組だが、探い探究が伴つていることによつて、不二を咏嘆した萬葉詩人と類を絶する。登山の初期は、眼ぼしい山の頂きを目指して最もやさしいみちを求めた。それは谷であり氷河であり山稜であつた。そして途中の障害に打ち勝つためにいろいろな道具やテクニックが工夫され、その進歩によつて、今まで不可能視された岩壁やむつかしい谷筋が登られはじめ、だんだん頂上征服から登攀自體を愉しむ方向に向つた。更に冬期登山が現われて登山界に新らしい世界が開けた。

すなわちいろいろな道具やテクニックは、苦勞を減らすためにあるのではなくて、登山の目的を達する手段である。登山術がすつかり機械化して、登山が必要以上に容易安樂になれば、それだけ登山の意義を失うことになる。

他方山を見て樂しむためには必ずしも私のいわゆる登山をする必要はない。老人でも身體の弱い人でもこの樂しみを味わえるようにしたい。そのためには、山々を見はらす觀望臺として適當な高いところまで自動車道路やケーブルをつけるなどはいゝことだと思う。また日數の餘裕をもたぬ忙しい人のために、登山の據點まで交通を便利敏速にすることもよかろう。しかしこれには何れも限度があつて、山の中や山の上が都會の延長になつては意味がなくなつてしまう。

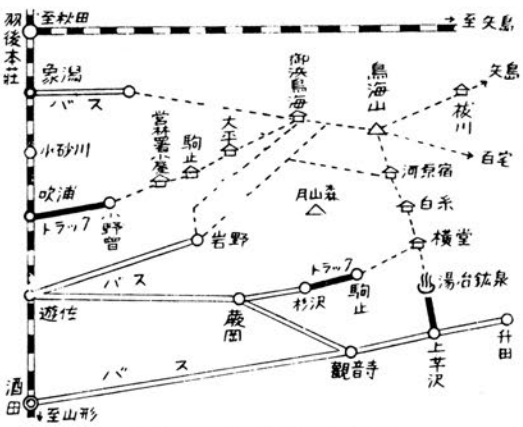
日本の人たちが氣付く前から日本の山や谷のよさを見出し、眞に山と山人とを愛し、その頃の原始的で不便極まる田舍生活をいとわずみずから山に入り、日本人に登山の妙味を教え、山岳の愛護を念とし、本國に歸つても死ぬまで日本とその自然とを愛したわがウエストン師の如きは、忘るべからざる先輩である。同師とゆかり深い上高地に集つて亡き師を偲ぶことはまことに意義深いことであり、この催しが信濃支部の御骨折りによつて年毎に盛大になつて行くのは慶賀に堪えぬところである。

(一九五二・七・五)

國體參加者への注意

日本山岳會山形支部

後藤氏の報告にもあるように鳥海山頂上附近はもう新雪も豫想されるのでアイゼンとピッケルは必携のこと、服裝も冬山のそれが望ましく手袋を忘れぬこと。



圖念概通交山海鳥

鳥海の山小屋收容豫定(案)

吹浦口(一七二名)

御濱班　八パーティー

大平班　一四パーティー

駒止班

A　監督　四名

B　オーブン　六〇名

藤岡口(二五〇名)

河原宿班　一〇パーティー

白糸班　一四パーティー

A　一五パーティー

B　一五パーティー

C　一六パーティー

＊　＊　＊

〈図書紹介〉

槇有恒著「山行」特製本

岡書院刊　A5判三五〇頁
寫眞　一七葉
地圖二葉　定價七五〇圓

岡書院から槇さんの「山行」の特製本が出た。戰後に岡書院から出た再刊本は、當時の用紙事情などで出版者の意に滿たぬものがあつたので、こんどアルバータの登山記と新らしい寫眞數葉を加え、三百冊の限定本として上梓することにしたのだそうだ。再版ではあるが、近時出色の出版といいたい。戰後復活した岡書院は、亂戰時代の出版界ではとかく振わないようだつたが、なかなかへたばらずに根氣よくこんな本を出すところをみると、岡さんも根つからの山男には違いない。若しスイスあたりで出版文化賞というようなものがあつたとしたら、この本などさしづめその筆頭候補というところだろう。

日本の山岳書で、世界に出せるものはいくらもあるまいが、「山行」がもし歐米語で書かれていれば、アイガーとアルバータの兩登攀記によつて、ウィンバーその他一流山岳人の著書と肩を並べ古典として殘るべきものだろう。こんどアルバータ登攀記が加えられて、決定版の形となつたことは喜ぶべきことだ。もちろんその他の登高記も、執筆當時東京日日新聞（毎日の前身）に連載された時には、山好きの青年たちの血を沸かしたものだつた。「山村の人と四季」や「南側よりのアルベン」のような香り高い文章もこの本の内容を豊かにしているのはいうまでもない。

アルプスに關しても古くは鹿子木博士の「アルベン行」などがあり、まだ著者より先にアルプスに登つた日本の山岳人には、「スウイス日記」の辻村さんや近藤さんなど二、三あるが、本格的な岩登りの技術や近代的登山を最初に日本に傳えたのは著者であり、本書の「岩登りに就いて」の一文は、日本語で書かれた岩登りの技術に關する最初のものであつた。そういう意味でも本書は日本の山岳史の上で劃期的な意義があつた。

日本の山岳文學の中で、いちばん廣い反響を呼び最も大きな影響を與えたものは小島さんの「日本アルプス」だつたろう。いつだつたか、詩人の日夏さんと文學や山のことなど話していた時に、その青年時代には當時勃興期の自然主義文學よりは、むしろ烏水の紀行文やラスキン論などの方に多くの影響をうけたということをきいた。小島さんのものは山好きの青年のみでなく、かなり廣い範圍に讀まれたものらしい。槇さんの「山行」の讀まれた範圍は烏水さんのものに比べるとかなり狹かつたであろう。しかしわが國の登山界に各學校の山岳部を中心とする新しい局面が展開され始めた時代であつたから、その影響ははるかに深かつたといえるだろう。私たちよりも一時代前の山の好きな青年たちが、多かれ少なかれ小島さんや木暮さんの影響を受けたように、私と同時代の青年で、直接にか間接にか槇さんの指導や影響を受けなかつた者はなかつたと言つても過言ではあるまい。日本の山岳書も少くないが、若しかりにその代表的なものを一つだけ擧げるとすれば、「日本アルプス」か「山行」ということになるであろう。

この新書には、著者の近影をはじめ、初版にはなかつた記念すべきいくつかの寫眞があり、又松方浦松兩君の美しい寫眞もあつて見ごたえがあるが、改造社の初版本にある寫眞のいくつかが無くなつているのは惜しい。多分戰災で原版もプリントもなくなつてしまつたのであろう。私は寫眞の良し悪しはよく分らないが、初版のアルプスのゼンヒュッテやアルプホルンのブレーザーのようなものにも愛着がある。山村の人と四季を傳えるあの種の寫眞も何枚かあつてもよいように思われる。巻頭のヘルンリからのアイガーは松方君の傑作で、一九二六年（昭和元年）の夏のものだそうだ。私のところにもこの寫眞の引延しが一枚ある。名は忘れたがたしかイギリスかスイスの名のある寫眞屋の燒付けたもので、昭和三年に槇さんから貰つたものだが、こんどの本の寫眞には出ていない空の雲などがよく出ていて、ずつと深味が感じられるとてもいい出來栄えのものである。裏に槇さんの署名がある。槇記念館でも出來たら寄贈することにしよう。（伊藤秀五郎）

NANDA DEVI

J. Languepin. L. Payan, (Arthaud. Paris, Grenoble. 1952) Fr 1500.

一九五〇年のアンナプルナ征頂に氣をよくしてか、昨一九五一年にはフランス山岳會リヨン支部主催で隊員八名から成る遠征隊を、ナンダ・デビーに送つた。この登山隊の收穫をまとめた寫眞帖がこれである。

昭和28年度版
山日記
豫價 ¥ 230
發賣 中

會員諸兄分として革表紙の特裝本の用意がございます
會迄お申込願ひます。
東京 神田 茗溪堂

計畫は西峰（七八一七米、一九三六年ティルマン隊初登）を登り東峰（七四三四米、一九三九年波蘭隊初登）まで三粁に亘る山稜を傳つて、東峰からロングスタッフ・コル（五九二〇米、一九〇六年ロングスタッフ氏東側より初登）に下る、というヒマラヤでは新しい一つの試みである。

四月二三日フランス本國出帆五月廿七日ガルワール・チヤモリ部落着（此地まで車を通ず）六月十八日ベースキヤンプ地（四九〇〇米）着。以後二六日までの間に、ロングスタッフ・コルに三張のテント、西峰南稜に第一（五六四〇米）第二（六一〇〇米）第三（六四五〇米）と高所キヤンプが設けられ、しかもどのキヤンプも充分に裝備食料を具えたというのである。この邊にも速攻方針がうかがわれる。

二七日登攀隊員ローヂェ・デュブラ（遠征隊長三四才）とヂルベル・ヴィニュ（二五才）は二名のシェルパを伴つて、ベースキヤンプを出發、第二キヤンプ泊。

二八日第三キヤンプを通過して約七二〇〇米附近に自ら第四キヤンプを設營。

二九日シェルパ二名を後方に送返し、二人きりになつて上方に出發したのである。その日の午後二時頃でのテントから二人が頂上へ向つて登つてゆく姿が望まれたが、それが最後で、消息をたつたのである。

一方サポーティング・パーティーは二八日ロングスタッフ・コルに登り、二九日東峰尾根第一キヤンプ（六一〇〇米）を設け、目の屆くかぎり捜索の望遠鏡を向けたが、二人の影はどこにも見當らない。支援隊は第二第三とキヤンプを進め七月六日ナンダ・デビー東峰のセカンド・アセントに成功したが、先の二人は遂に永久の謎に包まれてしまつたのである。

隊長ローヂェの手記によれば、西峰登頂後山稜中間と東峰頂上附近と二回のビヴァクを豫定し、充分な食料裝備を携行しているのであるが、第四キヤンプでの走り書には二人が非常な頭痛に惱んでいるとあり、隊長自身がベースキヤンプに六月二四日に到着、五日の後には七二〇〇米の高所キヤンプを出發して頂上に向つているというスピードぶりも、馴化の點でどうであつたろうか。東西兩峰をつなぐ三粁の山稜は高度七〇〇〇米を下らず、しかも中々困難な樣相をみせている。

本書に收載された寫眞は、アンナプルナの集と同じく、いかにもフランス人らしい好みが出ていて眺めるにたのしい。ナンダ・コートの雄姿が一再ならず出てくるのも吾々には嬉しいことである。

Cordillere Blanche
George Kogan. Nicole Leininger. (Arthaud. 1952) Fr 690

山岳 第四六・四七年

會報前號豫告の内容にて着々發刊の準備がすゝめられています。尚アンナプルナの記事に挿入するため、寫眞及地圖の轉載をフランス山岳會宛依頼したところ、此の程先方の快諾が得られたので、アンナプルナ山群の素晴らしい寫眞と地圖が「山岳」に掲載されることゝなりました。各位の御期待にそえるものと思います。尚本年度會費未納の方への發送は見合せますから會費未納の方は此の際至急御納め下さるようお願いいたします。

一九五一年夏、フランス、ベルギーの山仲間九人（女性二名を含む）の隊が、南米ペルー、コルディレラ山群に遠征登山した記錄である。成果としてはネヴァダ・ピスコ（六〇〇〇米）の初登、ネヴァダ・ウアスカラン（ペルー國最高峰六七六八米、一九三二年墺國登山隊初登）の試登、ネヴァドアルパマヨ（六一二〇米）の初登、キタラジュ（六一〇〇米）の初登であるが、恐らく地球上で最も華麗な均整美を持つた山と言われるアルパマヨ峯の初登は、一九四八年瑞西隊が失敗していることを別としても、かゞやかしいものと言うべきであろう。

女性二人だけのパーティーが六一〇〇米の處女峯を完登し、その登はん記が女らしい筆致で綴られているのも樂しい。

南米大陸の横斷飛行、登山を終えてからインカ文明の遺跡を探るくだりなど、旅行記としても中々興味深いものがある。

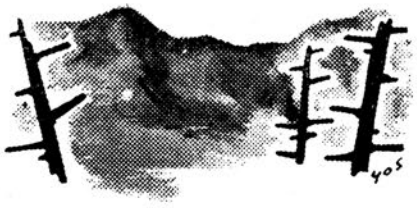
この登山隊は親しい山友達の全く私的な企てのようであり、隊長というものもなく、名目上は佛白の山岳會その他の後援とはなつているが、いかにもノビ〳〵と氣らくに行動しているのは美ましく思われる。

Les Trois Perniers Problemes des Alpes
Par A. Heckmair (Arthaud. 1951) Fr 700

一九三八年アイガー北壁完登者四人のリーダー格ともいうべき著者が、アルプスに於ける最後の三問題として、マッターホルン、グランド・ジョラス、アイガーの三大北壁を擧げその登はんに絡まる物語や實記を綴つたもの、獨逸語からの譯出で、特に佛譯本のために著者が昨一九五一年八月、異常な困難を冒して敢行した、グランド・ジョラス、ウォーカー峯側壁の登はん記が加えられている。最後まで殘された問題というだけに、どの北壁も、寫眞をみても記述をよんでも尋常一樣のものではないことが、よく分かる。アクロバティスムの極致が、どんなものかを知ろうとする人に一讀を勸める。（以上三項　藤島敏男）

新着外誌

偶々來朝中のSidney Brookes氏（ニュージーランド・アルプスの經驗者）から松方氏を通じてThe Canterbury Mountaineering & Tramping Club の機關誌である"The Canterbury Mountaineer" vol. 5, 1950—1951, No. 20が會へ屆けられた。ニュージーランド・アルプスの記事が殆ど凡てゞあることは當然だが、昨年のエヴェレスト遠征に參加したE・リッディフォード氏やE・ヒラリイ氏の名がみえる。ヒマラヤの訓練という點からいつてニュージーランドの山はアルプスより優つているとシプトン氏も云つているように、寫眞だけから見ても荒削りな山容がうかゞえる。B5判一四〇頁。（TM）



信通員會

唐松から冷池へ

大内來三

七月廿六日から三日間白馬から鹿島槍迄縱走致しました。六年振りに訪れる白馬の麗峯は懐しく、又快晴とは行かない迄も越中側の眺望に惠まれて、私の山日記に樂しいケルンを積む事が出來ました。然し、往時と異り、登山客の多いのと、その裝備無計畫さには心寒いものを覺えました。幸い昭和醫大の方々が良く世話されていられたので事故は皆無の事とは思いますが相當考えなければならぬ事と思います。

二日目は唐松の小屋泊りでしたが超滿員で山小屋の憩は少しも味えませんでした。

一般的に云つて山小屋が近頃とみに、營利的になり、事務的な、態度が濃くなつて來た樣です。唐松からは、新道が開かれて道も良くついていました。この日はガスが多く氣づかわれていたのですが白岳の手前邊りからは雨に見舞われつらい山旅となりました。開設と聞いて居た五龍小屋は今年は間に合わず無人です。五龍では雨が上つたのですが八峯キレット前で、又降られ、鹿島槍はやゝ晴間も見えましたが、それも束の間、布引は雨の中を走りどうしに冷池の小屋へ辿りついた次第で、遂に期待した鹿島槍の麗姿には一度も接する事が出來ませんでした。翌日も雨が上らず先は諦めて長ザク尾根を降つて參りました。

羅府から

錦織保清

本日別便にてJaques Boell: HIGH HEVEN—1947 London一冊別送いたしました。ルームの書架に加えさせて頂きます。原書はフランス語、ドフィネ山群登高記錄、之をロンドンで英譯出版したものです。この英譯書がどうして山に行く人の少いこのロスアンゼルスのDown Townの本屋に新本のまま數冊棚曝しになつているのか、又どうして私の目についたのか不思議です。ドフィネについては故美木富士哉氏の書いたラ・メイジュ登攀史抄（探險Ⅰ）を手傳つた私には妙になつかしい思い出です。

ドフィネといえばラ・メイジュラ・メイジュといえばジャン・コストという連想をもつわれわれにラ・メイジュの登攀記錄が收められていないのはかえつてめずらしくてよいかもしれません。原著者はラ・メイジュの東及南側に對峙する山を綿密に登つている樣です。三二葉の原著者自身の手になる寫眞とルート圖が寫實的な本文と相俟つて「過去二十年の登高が生涯を閉る迄充分の想い出を私に與えた」と言い切る原著者の高峻山岳行における劇しい息吹を感ぜしめます。

六・二八、ロスアンゼルスにて

西吾妻と新高湯

渡邊公平

八月廿三日の夜行でたつて白布高湯より西吾妻に登り、人形石を經て姥湯に下る豫定のところ、尾瀬的濕原と花の美しさについのびすぎて時間がなくなり、豫定を變更して人形石から新高湯に下つてしまいました。

國立公園になつても登山道は惡く、雨の降つたりやんだりしたせいもあるが道即ち溪流となり泥塗れとなりましたが、シーズンオフも近いため一人の登山者にもあわず、新高湯の原始的な旅舍と併せ大いに東北の山の佳さを滿喫し得たことは幸でした。

新高湯は七月十五日に山崩で大半流されたのを再建していました。それでも湯治客が數名滯在していました。一泊二百圓は驚き。

指導標は立派なのがあるが登山者の欲しいところに無いというような地點が再三あり、今後もう少し山麓に近い地帶の指導標を整備して欲しいと思いました。

しかし西大嶺から人形石に至る稜線はなかなか氣分のいいところです。吾妻の南面について國體の豫選を行つた福島支部の報告などを頂きたいものです。

（八・二五赤湯にて）

大雪山の小屋と指導標

村上金吾

層雲峡から黒岳石室まで電話を架設したこと、一合目毎の導標も金看板式の立派なものにしたことは結構ですが、案内書に黒岳石室には寢具があり食事もできるようにあつたのでそのつもりでゆくと、食事はできず、寢具は毛布を三人に一枚割當てるというから、それでも助かると思つていると、それは全部パーテーに占領されてしまつた。パーテーの途中は毛布を持參しながらリュックの中にし

ハイキング一〇〇コース

ハイキング編集部編

ハイキング出版社　一〇〇圓

雜誌「新ハイキング」に投稿された二百餘に餘るハイキングコース案内の中から百を選んで一本にしたもので、奥武藏、丹澤、上毛と上總、信濃路の山等々グループ別に分類してある。

新しく踏査されたもので案内も詳細で初心者のためにはいい手引となるし、形態も上衣のポケットに輕く入るように考案されている點は親切である。

たゞ百コースの選び方については、執筆者の顔ぶれやその表現力に制約されたのか、「富士をめぐる山」などで新しい幾つかのコースが採錄されている半面、那須や上越方面の好コースが選に漏れているのが惜しまれる。

全然コースの中に入つていない谷川岳や上高地の寫眞が巻頭に挿入されているのも不合理で、どうせ寫眞を入れるなら記事に關係のある美しい寫眞が欲しかつた。

巻末の一泊八〇圓からある隱れた山の湯一〇〇場案内というのも親切で氣が利いているが、野澤や湯澤、谷川、草津等を隱れた山の湯というのはどんなものか。但しそれらの中の隱れた安い湯宿が紹介されているのは愉しい。（H）

老童組の南アルプス行

——易老より聖、赤石、悪澤へ——

村井米子

三〇臺の古澤さん、四〇臺の網倉さんまで、老童と云つては氣の毒だが、日高信六郎大先達、石原博士に私と平均年令五〇才になりそうな一行が、實に愉しく、南アの中でも、人氣無い深山を縱走した。小舍や道の御案内がてら……

七月二〇日、一昨日來の雨が霽れ、午前七時、木澤村前澤旅舘を出て、營林署の軌道に便乘し、八時半北又渡着、一行五人と案内、人夫四人、大きい荷を負つて溪道を進む氣持、いかにも南アらしい。

佛島邊から丸木橋を渡るに肝を冷し、午後一時易老渡に着いたが水量激しく渡渉不可。西澤への道を三〇分進み易老のガレの前、鹿の待ち場の石積の河原にテントを張る。丸木橋を二つかける爲半日を費し、漸く明日の登路が出來たが惜しや光岳は割愛となる。

二一日。小鳥の聲に覺め出發は七時半、丸木橋を難なく渡りガレの下に戻つて、ブナ林の急坂を直登する。面平着は一〇時、針葉樹林となつたが相變らず鉈目も少く道を探すに手間どる。上面平一二時着、昼食後鹿の水飲場だという水溜のある岳樺まじりの栂や白檜の林の登高が實に長い。三角點にやつと出たのは三時四〇分。後四〇分で易老岳頂上着。こゝで初めて道標に逢うほど人跡稀だ。

倒木の多い尾根、コバイケイソウやオサバグサを賞でて仁田岳の手前のキャンプ場着は六時。

水は四丁程汲みに降りるが針葉樹の大樹に護られ二つのテントが可愛く張られる。

二二日。鹿のねた場の水邊に足跡が多いが、鹿も現われず朝霽れに聖岳、兎岳が美しい。七時出發。仁田岳まで藪こぎ四〇分、逸した光岳を見る。茶臼への偃松、石楠花の尾根は緩く明るいが全然刈り分けなく木暮時代と大差無さそう。

偃松くぐりどころか偃松と格斗だ。仁田池は花に圍まれた可愛い尾根の水。鹿の足跡と鹿の道がいつぱい、コケモモ、ツガザクラの絨緞を茶臼岳へ。お花畑で晝食。上河内岳は二時半。初めて黄花石楠花と雪溪に逢う。岩が美しい。雷鳥が雛を連れていたり、數々の花は愉しいが尾根の上下は遠く南アの地圖の見方はよほど考慮が要る。聖平着五時。

梢に聖岳を仰ぐ。大樹のテント場、溪流も走り深山の氣横溢。西澤からも登れる地、山小舍がほしい

二三日。早朝六時半發溪流をつめ一時間で尾根の白樺林、更に三〇分で肩に立つ。ぬつと聖岳が西澤のガレ越しに聳え、東に富士や笠が秀麗。急な岩石登りにかゝる前西澤の上に清水があつた。

聖岳頂上は一〇時半。目の前に赤石岳が大きく思わず快哉を叫ぶ。食後ぐん〳〵七〇〇米も降り、西澤の頭へ出、急峻な悪場をまた二〇〇米登つて、兎岳が二時。又ぐん〳〵と下り、中盛丸山に登る。溪へ巻めにはじめて人道を辿り百間洞小舍着六時。新築の小舍でやはりくつろげる。

二四日。八時發、百間洞の溪をつめ、花盛りの岩庭を百間平に登る。大澤岳を越える道、小濁川の溪もよく見えハイキング氣分だ。岩の急登になつてカモシカに逢い、尾根で入山後初めて人間に逢う、すつかり山も淺くなつた心地。

赤石頂上一時着、大きな雪田の向うに椹島への徑が見える。赤石小舍は無いが小濁川の渡渉は二回、廣河原小舍は健在。雪の多い尾根を小赤石、大聖寺平と漫歩、荒川小舍着四時、二組も同宿がある。

二五日。悪澤を越え二軒小屋に下り、二六日歸京。

五龍小屋

坂倉登喜子

快晴に惠まれて後立山行の第一まい込んで、小屋の割當毛布を使用する話をしていた。そのためわれ〳〵單獨行のものは全然寝具にありつけずそれに泊りあわした中學生らが騒いで殆んど眠れず私の知る限りでは極めて不快な山小屋でした。

旭岳から松山温泉へ出ようとして東川村近くまでいつて人夫達にあい、道を間違つたことを知つた。そのため時間を二時間も空費して勇駒別温泉の上まで引き返して松山温泉のわかれ道にはいりました。私ばかりでなく外の二組二十人ばかりの人達も同じ道を同樣間違つてくるのにあつた。これは勇駒別温泉から五〇〇米上の山の家のところから分れるのですが指導標がない。始めての者なら間違わない方がふしぎです。この山の家から松山温泉までは五〇〇米毎の立派な指導標が立つているが、かんじんの分れ目に指導標がないのでなんにもなりません。

旭岳の南側下、姿見の池のほとりにある旭岳石室は番人がいませんから、泊るにしてもはじめから寝食の設備のないことを承知してゆかねばなりません。(八月九日)

黒部だより

關田保男

八月八日に劔へ行つて來ました樣子を御知らせ致します。字奈月、櫟平間は運賃百圓で八時四〇分と午后と二本が乘せてくれます。櫟平阿曾原間は六〇圓です。池の平から二股へ降る途中の雪溪はクレヴアスが多いから注意、ハシゴ谷の出合より眞砂澤キャンプ地間は途中二ケ所程渡渉をしなければ行けません(ケルンあり)長次郎雪溪は出合より二三百米登つた所に大きなクレヴアスあり、その他は不明の所はありません。九月の山行は奥秩父 金峯山の豫定

日は興銀山岳部の沼倉さんや岡澤さんと信濃四谷からバスで細の迄御一緒で好都合でした。皆さんは白馬から大池の早稻田の小屋へ行くパーテイと黒部側へ降りるパーテイに別れて夏の山行をされるそうでした。私達は八方尾根から鹿松小屋に一泊し次の日は新設の五龍小屋に一泊、三日目に五龍鹿島を越えて冷小屋へ一泊しました。十一日頃塚本先生がおいでになられるそうなので、又五龍迄戻つて合流の豫定で居ります。まだ未完成の小屋ながら氣分的に感じがいゝので二泊します。

會務報告

小宴會記事

第一四四回　七月十七日（木）夜
講演　「オースタリーの山々」
講師　會員　高木正孝氏

高木氏は戰中戰後の數年間をヨーロッパに滯在され、その間に積まれたオースタリー・アルプスでの豊富な經驗をもとにし、主として西アルプスとの對比を中心に、オースタリーの山々に就いて、山登りの見地から具體的に述べられまたその人情風俗の細かい點まで興味深く話された。邦人ではおそらく最もオースタリー・アルプスに通曉している氏の口を通して聞くこれらの話は、氏がオースタリーの山々に寄せる限りない思慕と相まつて極めて印象的でさえあつた。氏の登攀の一端は前に「山岳」等にも收められているが、未だものされない數々の山登りについて一日も早く筆をとられることを、聽き手の一人として特にお願いしたい。同夜回覽されたカイザー・ゲビルゲやエッツタールの山々、アッシェンブレンナーやマリーネの寫つている寫眞も興味つきずたゞ會する者が十名餘りであつたことはいかにも惜しいことであつた。（M）

役員會

七月　役員總會（九日）
議事　ヒマラヤ委員會經過報告・第七回國體登山準備經過報告・栃木縣教育委員會より登山、キャンピング講師派遣方依頼の件・國立公園協會主催山岳團體代表者懇談會の件・本年度ウエストン祭報告・山梨支部總會に講師派遣・「山岳」第四六、四七年編集報告・「學生係」行事報告・「圖書係」からの報告・ヒンドスタニー語講習會開催の件・月例會計報告

講師派遣等

●六月廿九日甲府市で開催された山梨支部の總會に支部の依頼をうけ西堀評議員、伊藤理事が講演を行つた。聽衆約五百名、後支部有志との懇談會がなされた。

●栃木縣教育委員會からの依頼により那須高原での登山講習會に講師として原主事を派遣した。（七月十六日―十八日）

●山形支部の依頼により鳥海山に於ける登山講習會の講師として林・藤井兩理事及新村正一氏が參加した。（八月一日―六日）終了後現地に於て本年國體登山の諸打合せを行つた。

●六月下旬以來西川一三氏指導の下にヒンドスタニー語の講習會を毎火曜行つている。九月末で一應終了の豫定。

會員名簿近く出來

永らく御迷惑をおかけしていた會員名簿は近く出來上ります。既に豫約金百圓御納入の方へは出來次第發送しますが、未だ申込まれてない方には一部百圓でお頒ちする豫定です。部數の關係で割高になつたことを御諒承下さい。

圖書室基金

昭和廿七年九月十日現在

壹百圓　高杉正樹氏
四百二十圓　濱野正男氏
前回繰越殘高　四〇七四圓
殘高累計　四五九四圓

事務費寄附

貳百圓　石渡　清氏、藤野利夫氏

國體山小屋宿泊料決る

鳥海山の全小屋を通じて一泊二食三五〇圓（含米代）酒田市の旅館は選手監督四五〇圓（三食）視察團その他七五〇圓。廿三日の吹浦、蔵岡の中食代は五〇圓と決定。小屋では一日一回汁粉類のサービス有。中食はパン携行のこと。

酒田から吹浦或は蔵岡を經て駒止までのバスは協賛會で奉仕する。（山形支部）

駿河臺だより

ヒマラヤ遠征と國體登山の二つの記事が重つたため思いきつて四頁ふやした。山岳會としては二つとも大きな仕事であるからその成功を期したい。

第一四六回小集會
日時　十月二日（第一木）六時
講演　歐洲の旅
講師　會員　島田巽氏

十月は特に日取を第一木曜としましたから御了知下さい。

第一四七回小集會
日時　十一月廿日（第三木）六時
講演　ネパール紀行
講師　先發隊歸還者　田口二郎氏

但し都合で講演及講師變更になるかもしれません。

編集子は新參だから編集上の御注意や御希望も遠慮なく御投稿願いたい。できるだけ會員諸氏の氣持を紙上に反映させるつもりです。

昭和廿七年九月二十日　發行
東京都千代田區神田駿河臺四ノ六
發行所　社團法人　日本山岳會
編集者　渡邊公平
電話〔自五一一一 至五一一五〕神田　日本體育協會
振替口座東京四八二九番
東京都港區赤坂溜池五番地
印刷所　株式會社　技報堂